

○黒島＝「牛の島」維持・発展のため、草地管理技術と粗飼料自給率の向上を目的に黒島農業青年クラブが「牧草コンテスト」の開催や寒地型牧草の栽培を行うなどクラブ活動を通じて、「黒島の牛を支えるのは若い自分たち」との自覚を持たせ、次世代の担い手を自分たちで育てる仕組みを構築。

○平成18年度のクラブ設立から現在に至るまでの、青年クラブ活動による地域活性化や自給粗飼料生産技術向上に向けた取組が評価され、令和3年度には「農山漁村地域活性化部門」で沖縄県農林漁業賞を受賞した。

### 具体的な成果

■青年クラブ員が自主的に県内初の取組であるコンテスト開催に向けて活動した姿は、他の青年クラブから高い評価を受けると共に刺激を与える機会となった。

■コンテストの結果から自らの現状を把握し、地域の農家とも比較することで自身の草地管理に対する意識向上を図ることが出来た。

■青年クラブ員全体がプロジェクト活動として、黒島における粗飼料生産方法の確立を行っていくこととしており、島の先導役として成長するなどの効果が見えている。

■冬期の飼料不足の補填として、寒地型牧草を平成29年度から導入し、令和2年度には黒島での栽培面積が12.4haとなり、令和3年度に石垣島でも栽培が普及するなど寒地型牧草に対する意識啓発を図ることが出来た。



■クラブ活動による黒島の地域活性化や自給粗飼料生産技術向上に向けた取組が評価され、他の青年農業者組織に対する模範的な活動を展開していることから、令和3年度に「農山漁村地域活性化部門」において沖縄県農林漁業賞を受賞した。



### 普及指導員の活動

平成27年～令和元年

■県内初となる第1回黒島牧草コンテスト(黒島農業青年クラブ主催)を開催。

平成29年からは地域農業振興総合指導事業を導入し、第5回までコンテストを実施した。

コンテストで講習会を実施し飼料分析から見てきた課題の解決策を指導。また寒地型牧草に係る実証展示圃を黒島で設置し、既存の暖地型牧草に寒地型牧草を追播する栽培技術を構築するなど、黒島における寒地型牧草の栽培マニュアルを作成。黒島において指導農業士が2名認定された。



令和2年～令和3年

■黒島・石垣島において寒地型牧草に係る実証展示圃を設置した。黒島農業青年クラブ員および石垣島和牛改良組合女性部員の計23名を対象に寒地型牧草栽培講習会を実施した。

### 普及指導員だからできたこと

- ・担い手チームと技術担当との連携で、黒島全体の自給粗飼料生産技術向上と担い手の育成を併せて行うことが出来た。
- ・寒地型牧草は県内でも馴染みの少ない牧草であるが、実証展示圃設置や講習会による周知によって寒地型牧草栽培を普及することができた。

## 黒島における自給粗飼料生産技術向上に向けた取組

活動期間：平成26年度～（継続中）

### 1. 取組の背景

沖縄県竹富町黒島は、面積約10km<sup>2</sup>、人口220人で、肉用牛飼養頭数（黒毛和種）は2,800頭余と、人口の10倍以上も牛がいるため「牛の島」として知られている。島の産業を支える畜産業のほとんどは肉用牛繁殖経営となっており、当普及課では、黒島が竹富町肉用牛拠点産地の一つとして今後も持続的に発展していくために、黒島農業青年クラブ（以下、青年クラブ）に対して、技術指導を通じた担い手組織の育成を行っている。黒島は、島全体が隆起珊瑚礁の琉球石灰岩で構成されており、その上にわずかに作土層がみられる極めて特徴的な土壌である。これまでに、国の補助事業等を活用して石灰岩を砕き、土層を確保してきたが、表土自体乏しいことから、草地更新時に耕耘ができない。そのため、更新を行うには、重機利用による土木工事が必要であり、それに伴う草地更新費に要する負担が大きく、国の補助事業が無ければ実施できないのが現状である。このような環境下で、良質な牧草を生産するには、草地管理技術の向上が重要となり、かつ黒島における牧草栽培管理の方法を検討していく必要があり、粗飼料自給率の向上を図ることを目的に沖縄県で初となる牧草コンテストの開催に取り組むことになったほか、新たな自給飼料生産技術として寒地型牧草を導入することとなった。

### 2. 活動内容（詳細）

- 当普及課内において、担い手担当は、青年クラブが主体的に取り組むための誘導や、意見等の集約と企画への反応、関係機関との調整などコーディネーター役として、技術担当は、課題に対する具体的な解決策の提案や技術指導・助言のためのアドバイザー役として位置づけ、連携して取り組める体制を整えた。

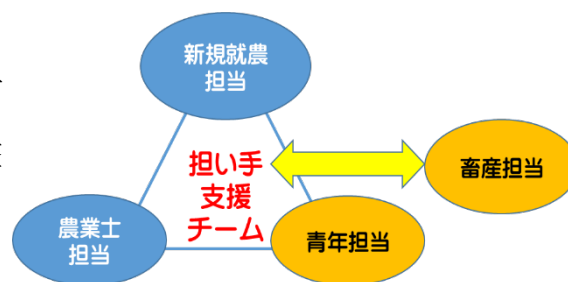


図1 課内における支援体制

- 牧草コンテストは青年クラブが主体的に取り組む活動であることを自覚させ、牧草を分析して終わりではなく、青年クラブ全体で改善に繋げるため、検証に必要なデータの蓄積に努めること、コンテストをやる意義をきちんと理解することへの合意形成を図った。
- 実行委員会を立ち上げたが、青年クラブからの意見や要望を本企画に反映することで、極力自主性を発揮させることを心がけた。コンテストに出品する草地の土壌成分調査・牧草サンプリング及び試料調整方法などは青年クラブ員自身がその方法を習得できるよう演習を行いながら実施した。

- 平成 27 年度から 5 年間牧草コンテストを開催した。主に島内農家が生産した牧草を集めて成分分析を行い、分析結果を元に成績優秀者を表彰した。また、コンテスト開催時には講習会を実施することで、牧草の成分分析結果から見えてきた課題に対する解決策を指導した。
- 平成 29 年度から地域農業振興総合指導事業を導入（3 カ年）、①品質の高い粗飼料の安定生産、②生産率向上、発育良好な子牛の出荷による安定した畜産経営、③地域リーダーの選抜・次世代リーダーの育成を 3 本柱として支援することとなった。29 年度には、黒島初の指導農業士が 1 名認定された。また、①において寒地型牧草の導入を行った結果、黒島における寒地型牧草利用の可能性が示唆された。令和元年度には「黒島における寒地型牧草栽培のすすめ」というマニュアルを作成した。
- 地域農業振興総合指導事業終了後も寒地型牧草の栽培を青年クラブが主体的に継続し、令和 3 年度には石垣島においても寒地型牧草の導入を図った。また、寒地型牧草栽培講習会を青年クラブおよび石垣島和牛改良組合女性部の計 23 名を対象に行い、普及推進を図った。
- 補助事業で造成した放牧地は干ばつに弱く、土壌の経年劣化に伴い、ネズミノオが散見されている。ネズミノオの防除方法として、牛糞を堆肥化し、ネズミノオ株に覆い被せることで消滅させる取組を実施した。



寒地型牧草栽培講習会の様子

### 3. 具体的な成果（詳細）

- 青年クラブ員が自主的に県内初の取組であるコンテスト開催に向けて活動した姿は、他島の青年クラブから高い評価を受けると共に刺激を与える機会となった。
- コンテストの結果から自らの現状を把握し、地域の農家とも比較することで自身の草地管理に対する意識向上を図ることが出来た。
- 青年クラブ員全体がプロジェクト活動として、黒島における粗飼料生産方法の確立を行っていくこととしており、島の先導役として成長するなどの効果が見えている。
- コンテストの上位入賞農家は、黒島家畜市場において、子牛出荷実績がトップクラスであるなど、結果として良質な牧草づくりが、子牛の発育にも良い影響を及ぼしていることを地域の農家が証明した形であり、良質な牧草づくりへの関心を更に高めたと思われる。
- 冬期の飼料不足の補填として、寒地型牧草（イタリアンライグラス）を平成 29 年度から導入し、令和 2 年度には黒島での栽培面積が 12.4ha となり、令和 3 年度には石垣島でも栽培が普及するなど新たな生産技術に対する意識啓発を図ることができた。令和元年度には栽培マニュアルを作成し、黒島における栽培体系を確立した。
- ネズミノオ株を刈り取り、堆肥で覆い被せることで、ネズミノオを消滅させ、既存の暖地型牧草が回復し、牧草地に再生することができた。牛糞を堆肥化し、草地に還元する循環型システムを構築したことで、新たな草地

管理技術が実証された。

- クラブ活動による黒島の地域活性化や自給粗飼料生産技術向上に向けた取組が評価され、令和元年度には竹富町が沖縄県より肉用牛拠点産地として認定され、令和3年度には黒島農業青年クラブが「農山漁村地域活性化部門」において沖縄県農林漁業賞を受賞した。



拠点産地認定交付式の様子

#### 4. 農家等からの評価・コメント（黒島畜産農家）

- 牧草コンテストをとおして牧草に興味を持つようになった。以前は、採草地として利用していた土地を放牧地として使う農家が多かったが、今は放牧地を採草地に変える農家が増えた。肥料についても、時期に応じたものを選ぶようになった。
- 牧草を伸ばして、ロールの個数を多くとることばかり考えていたが、牧草の栄養成分が牛の発育や健康に及ぼす影響を知り、適期刈り取りの重要性に気づいた。
- 冬場は既存の暖地型牧草の伸びが悪い一方、寒地型牧草は生育良好で、飼料不足を補ってくれている。周辺の農家も生育状況には目を凝らしている。

#### 5. 普及指導員のコメント（沖縄県八重山農林水産振興センター農業改良普及課・技師・長坂龍志郎）

- 黒島農業青年クラブは、結成から16周年を迎え、沖縄県農林漁業賞を受賞した。設立当初から島の畜産を支えるためにセリ市場清掃やセリ運営協力、高齢農家が変わって牛の運搬や船積みを行うなど地域貢献の高い活動を行っている。また、牧草コンテストの開催を通して、クラブ員の牧草に対する意識が変わってきており、クラブ員の意識の変化が黒島全体に広がっている。令和元年度に肉用牛拠点産地に認定され、今後のさらなる畜産振興のために寒地型牧草を導入するなど新たな自給粗飼料生産技術確立を期待し、今後も支援していきたい。

#### 6. 現状・今後の展開等

- 黒島の主な草種は暖地型牧草のため、気温が低下する冬季には収量が下がってしまう。そのため、冬季の収量アップを目的として寒地型牧草の導入を行った。青年クラブ員が主体的に栽培に取り組んでいることから引き続き支援していく。
- 新たな取り組みとして、優良種雄牛の精液を導入し、青年クラブ員の飼養管理能力向上を目指すプロジェクト活動を実施している。今後とも、黒島の地域活性化のために、自給粗飼料生産技術および飼養管理技術向上に向けて取り組んでいく。